

道の師 心の友を偲ぶ(二)

富沢 泰

(会員・蒲江町畑町浦)

蒲江町史の編集

先生が蒲江町史と取り組むようになったのは、蒲江の郷土史に関心もつ人や、文化財調査員が、佐伯史談会の会員であることが要因といえよう。終始主管課町教委は無論、町長初め町幹部、町議会筋も、全幅の信頼を持ったことである。町史編集委員会の副委員長だった私も、一度も気苦労を煩うことがなかった。

蒲江町史編集長として編集の業務というも、実質的には先生の著述と私は思っている。佐伯市史の編集には多く碩学が参加し、それぞれの専門の分野を担当されたが、蒲江はその点そうした専門的研究がなされていない。現代編はともかく、古代、中世、近世史は先生に依って編成されたものである。

特に蒲江は中世佐伯氏以前の歴史的資料がない。しかし佐伯地方という名のもとでの一千年の郷土観のらち外ではない。従って佐伯市史を多分に参考資料としたことを「町史編さんの終りの言葉」にも述べている。

『蒲江町史』の一番の特徴として先生と共に私達も自負するものは「浦々の生業と民俗」の項を総頁六五〇頁中、一八〇頁もとっていることである。その地方の過去の民俗史、農漁民の生活を市町村史にはあまり取り上げていない。之は先生の郷土史に対する歴史観が然らしめたものである。例えば、佐伯の郷土史といえは中世佐伯氏とその興亡、近代は毛利氏とその外週が総てに近い観がないでもない。古くより下層の庶民の貧困と無学に近い境遇では記録が乏しい。従ってその調査も至難ではある。日本自体に民俗学が定着したのも明治の中期以降からではあるが……。

蒲江の「浦々の生活」調査は現段階では一応、本格的な調査を行った。大分県教育庁文化課の指導の許に、大分県民俗調査の権威者、染矢多喜男氏(当時県立森高校長現碩南高校長)を筆頭にして、文化課後藤正二氏(現専門員)等、拾名の専門家と地元の教委、文化財調査員、

古老と多数、多彩な陣容で前後三回、十三日に及ぶ現地、現物の聴取り調査を行なった集積を、報告書としてまとめたものである。

町史の刊行と併行して「蒲江の漁撈漁具」の収集を始めた。その内容も町史の編集の中に多分に掲載し、捨てられ失われて行く民俗文化財の再評価を図り、県指定有形民俗文化財になったのも町史の編集の賜である。

次に特徴ある編集の一つは「蒲江の文学」を紹介したことである。手許にある先進の市町村史三、四を比較してみたが郷土文学の項は設けられてない。それを僅かな紙数だが調査している。佐伯藩末期に重点を置いて、蒲江越しの二つの峠、あるいは浦々、島まで漢詩を中心にまた短歌も掘り起している。佐伯の郷土史家佐藤鶴谷翁によって「蒲江八景」が『佐伯志』で公表されているが、それ以外佐伯藩資料あるいは旧家の古文書資料を丹念に調査をされ、漢詩二十数首に及び秋月橋門父子、松下筑陰、秋山、明石秋室、橋迫春鞞等の名が挙げられ、吟詠の対照地は入津峠と轟峠、全般的な浦々、深島、屋形島に及んでいるのは、旧藩時代の文人、墨客も来遊し、僻地なるが故に幾日か滞在し詩囊を温めたに違いない。短

歌も相当数あげられている、関秀歌人も加わっている。

入津坂 明石秋室

欲下入津雲坂長、俄驚氣候炎涼

横空一嶺界南北 北麦青々南麦黄

入津に下らんと欲して雲坂（高い坂道）長し

俄かに驚く氣候炎涼（暑いと涼しいと）を變ずると

空に横たう一嶺南北を界し

北は麦青青南は麦黄なり

（入津坂とは佐伯市木立より蒲江町畑野浦に越す峠海拔五百米）

佐伯藩明石秋室、名大助、郡代町奉行の要職、詩人

粒島帰帆 重光（不詳）

夕な鳥さちある船な帆をあげて

粒島かえる海士の釣船

（粒島は蒲江湾口、中央にある三角鍾形の小島）

名吟、秀歌といえども管底に納められたままでは価値は定まらない。発表されてこそ一般に之が伝えられる。

「蒲江にはいろいろな文学はあるが、詩碑も歌碑もない、淋しいことである」と文学の項の終りを結んでいるが、それはそれとして、先生の碑こそ残されるにふさわ

しい人であり、文学の持主では有るまいか。

町史の編集の中で、更に加えねばならぬことがある。

離島 深島の取材行である。

深島は蒲江浦より海上十kmの日豊海岸の孤島である。

先生自体島の状況は『佐伯史談』に二度程探訪記を発表している。今は定期便あり、水道・電気も整っている。

此の島は藩政時代、流刑の島であったが、その沿革を年代順にみると、享保年代（一七一二年）赤木村（現直川村の大字）の百姓四戸の島の開拓者が佐伯藩の藩命に依って移住、寛延年間（一七四三年）同じく赤木村百姓十五戸所替されている。先住四戸は屋形島（蒲江浦より二km内湾になる）に移される。

佐伯藩最大の百姓一揆は文化九年（一八一二年）動員力三千といわれているが激しく暴動化せず妥結出来たことはまずまずだが、首謀者二人斬罪、六人深島遠島、所替八人尾浦となっている。

深島取材班は四、五名、無論先生が中心であるが、この一揆の原動力となったのは先生の郷里本匠の百姓である。言わば先祖が悲涙に明け暮れた島への慰霊探訪というのがふさわしい。船から降りると砂浜をはさんで島は

南北に別れて三十戸の集落がある。現在は完全に漁業専業である。

島の南部の台地は想像以上に広い。殆んど耕作を放棄した畑は草原と化し桑の木だけが赤い実をつけて熟れていた。五月半である。

「無縁法界三人墓」と読める。誰の墓なのか、何時建てたのか、部落の人も知らない。また弔う人もない。刑が満つればふるさとに帰える時もあったであろうし、またそれをどれだけ望んだことであろうか。異土の地、この塔の下の故人にも父や母や妻子達もあったであろうに……そんな思いに百幾十年の昔を偲ぶ胸中、いつか私は桑の実を口にしながら

山の島の桑の実を小籠かごにつんだは幻か

赤とんぼの唄を口ずさんでいた。日頃あまり歌声をたてない先生も歌っている。

何回も何回も繰り返し歌った。

遠い日の父母やはらから、ふるさとの山野……

私は小声で歌う先生の心の中に幼い日の追憶をそこに見たような瞬間であった。

僅かの水流の小溝を隔てる向こうにホルトの大木が繁



役の行者の石像（深島）

っている。そこに歩を運ぶと「地藏菩薩」と「役の行者」の石像、地藏菩薩はさておき「役の行者」と深島とは一体どんな歴史的つながりがあるのだろうか。行者は山岳宗教の開祖「役の小角」であるが、先生の語る処では、佐伯市西上浦の彦嶽に一体祀られてあるが、他は知らないという。

「文化百姓一揆」の六人中の一人に因尾の山伏が居たからその関係であろうか。それにしても、この石像をたてるのが流刑囚に許されたであろうか。後代誰れかが、何等かの関係で建てたのであろうか。不思議だと何度も

話し合った。

これに関連して後日譚がある。

『蒲江町史』が済んで、先生は郷土の『本匠村史』にとりかかった。その稿は相当進んだと思うが刊行迄はいたらなかった。私は今夏本匠教委の主催する高校生の集いに「ふるさとと高校生」のテーマで講義を頼まれた。

本匠村の歴史の中で特記するものは旧中野村の宇津々部落の「聖嶽の古代人骨」の発掘と「文化百姓一揆」だと思っている。一つは考古学的に佐伯の黎明、一つは封建制度から農民解放の黎明、宇津々谷は先生の誕生地で然も村史編集責任者である。

私に異説があつてはと思ひ電話連絡した。先生から百姓一揆に就いては蒲江町史以来の宿題もあるから、可成り調査も進め脱稿したから本匠に登る時自宅に立寄ってくれとの返事、その当日、八月三十日、原稿を渡して下さった。可成り分厚い。一応目を通したがほんのかけ足。帰路稿を返しに立寄り一時間餘り話し込んだ。別れに「当分お互いに弔詞は読み合はないこと」との言葉で別れたが、それが健在な先生との今生の別れ、若し「百姓一揆」の研究、深島の「役の行者」の謎がなければ恐ら

くこの訪問はなかったかも知れない。茶道にいう、「一期一会」の心をこれ程、切実にふれたことは人生そう幾度もあるものでもあるまい。

そしてまたこんなに早く先生の追悼号の文を書くとも思わなかった。私は「百姓一揆」文書を詳細に通読し、深島以来の「役の行者」像と流刑囚等の刑期がすぎ被災の顛末を知りたかった。

本匠の緒方教育長から先生の草稿のコピーが送られて来た。

「七ヶ村百姓一揆の勃発」

総字数、八二五〇字に及ぶ、大資料であり藩政資料、其他因尾を筆頭の七ヶ村に残された伝承資料等も勘案されているが、新しい資料も追加補説されている。深島に遠島された山伏は宝積院と名乗る修験者であるが、毛利家文書の何処にもその名は見当らない。緒方教育長は一揆の一件落着するや、山伏二人は山中に遁れたという話も伝わっているとも教えてくれた。すれば毛利家文書に刑罰者名がないのも当然である。何れにしても早く本匠村史が完成され、先生の靈前に供せらるる日を願ってやまない。

地方史を調べる方法として、その地域を及ぶ限り足で歩く。この当時、歳には不相応に、健脚であった先生は、編集助手の富高丈夫主事を帯同してよく歩いた。明石秋室の詩「入津坂」は道絶えて六十年、敢えて此の坂を敷わけて、しだをたおして登攀した。西南役の陣地津島畑も二度、その内一度は畑野浦史談会も同行した。県境波当津浦から日向北浦町との山境に百餘年前の土塁の跡が落葉に埋もれていた。佐伯惟治の足跡を追ったのはいうまでもない。惟治の靈を祀る丸市尾部落の富尾神社、北浦三河内の尾高知神社は遠くない。

佐伯よりバス通勤をした青山―蒲江間の轟峠は道の順路は昔も同じ劉子龍こと秋月橋門（藩校四教堂教授）の轟山暮雪（轟山の暮の雪の漢詩）が有るが、先生自体、大分合同新聞の夕刊「灯」にまた一文を残している。

唯一つ旧上入津村の尾浦の伊予国石鎚神社の分靈を祀る山頂（天巢岳）と、中腹にある佐伯藩探掘の鉾山の廃坑の跡「金山谷」は何故か探訪せずに終った。

最近よく新聞に報道される芹崎山（西野浦）には富高君とよく登っている。太平洋戦争当時山頂まで軍用道路があったので車で登れる。「つはものどもが夢の跡」の

砲台陣地跡のみならず、佐伯藩の異国船来航の監視所、当時「遠見」所のあった処とも伝えられている。ごく最近山頂を切り開いてみると石積みを廻した中に世情騒然たる安政年間の刻銘が発見された、地区の人から連絡があった。そこが「遠見」一番士の溜りだったのだろう。

往古の歴史、雄大な自然、更に詩情、蒲江町史は地方歴史と文学が渾然と一体となって編集された羽柴民俗学の一つの表現だと私は評価している。愛してくれた、私達のふるさと蒲江の然も芹崎山を、大分合同新聞の「灯」に掲げた。これは蒲江に取材したものとしては絶筆となつた。

続、せんざき 芹崎山 羽柴 弘

芹崎(せんざき)は県南蒲江町西野浦の背後にそびえる山である。高さは四〇〇米そこそこ、これが国定公園日豊海岸に、東へ向かって三キロあまり一直線に突出し、しかもその南側は三〇〇呎ほどの断崖の連続である。

さすが日向灘、目の届くかぎりの海のひろがり、四国の島影は雲海の彼方であろうか、視界には全くはいらない。東南方はすでに太平洋である。

この半島状の山頂部約数百米にわたってフジツツジの大群落が広がり、陽春四月には淡紅色の花じゅうたんにおゝわれる。

私はこの春友人に招かれて、これを觀賞する機会に恵まれた。ちょうど満開のツツジは、いずれも高さ一呎半ほどの株立、ゆるい傾斜地に数十呎の幅で妍(けん)を競っている。コースをゆっくり歩けば一時間近くかかる。葉桜の陰があり、遅出(おそで)のわらびも多く、ほおをなでる春風はこちよいい。

北側には入津湾五つの入り江がひろがり、行き交う船や浦々の家並み、船だよりのにぎわいが手にとるように見える。(中略)

芹崎山の突出しているこの海は、すでに日向灘であり、見はるかす大海原は太平洋である。この壮大な景観といふ、展望といい、この芹崎山は日豊海岸国定公園中、最高の場所である。ここを観光地とすること、まことに適切である。ことにフジツツジの大群生に目をつけ、雑木、雑草を伐りき払い、小道を通じて開発し、盗掘から守りつゝ管理して来た地元西野浦の方々の努力や、蒲江町当局、町内有識者の

指導や援助のおかげである。

幸いにも太平洋戦争の末期に、豊後水道に侵入する敵機迎撃のための機関砲座の珍らしい遺跡もあり、来年の四月には満開のツツジの観賞をお忘れにならないよう、観光登山をおすすめする次第である。」

(五六・六・三夕刊大分合同新聞)

羽柴先輩さようなら

穂積英雄

(会員・佐伯市藤原)

三月も末となり龍護寺観音堂の裏山の山桜が今を盛りと咲き乱れています。土堤を通る毎に羽柴先輩の思い出が私の脳裏を離れません。

先生が不快で南海病院へ入院と聞いた時、私も西田病院に入院中でした。そのうち退院されたと聞いてお見舞いにも行かず荏苒と日を過ごすうち、上尾病院へ再入院、面会謝絶との事で御会いせぬまま訃音を聞いて啞然としてしまいました。先生とは山口市への研修旅行が最後となっていました。誠に残念の極みです。

上野村(弥生町)石丸に生まれた私は、父の仕事の都合で中野村(本匠村)中野小学校で六年と高等科を卒業しました。先生は三年先輩でした。先生と最初の出会いは、弟さん道明君と大分工業受験のため大分市に行き、大層親切にお世話を頂きました。其頃先生は師範学校の炊事委員長を務められ、大人気であった事を知りました。翌々年私が入学した時は、二年前卒業されてたしか東雲小学校へ赴任されていたように思います。時々大分に出られ教会へ同伴して下さったりしました。教職に就いてからも時々お訪ねして御教示を受けました。

先輩のお人柄については、皆様が述べて居られますので省きますが、キリストの使徒の再来のような方で愛想が良く笑顔が焼き付いて離れません。誠実で人の面倒見がよく、とことん人の世話をされました。益田学従兄の「拓本展示会」を死去の前年に史談会主催で開いて頂いた事、墓石に記念の碑文起草して下さいました。その頃先生は病軀を推して遂行された事を思うと感激の涙が出て仕方がありません。深くお礼申し上げます。

先生の唯一人の弟さん道明君と私は同年で、よく往き来して、仲のよい遊び友達でした。私が師範三年の春の